

「臺灣文藝界への待望」

楊

行

東

われ／＼は將來すべき臺灣文藝界への待望を述べる前に先づ「臺灣文藝とは如何」について其の概念を明らかにせねばなるまい。

臺灣文藝!! それは取りもなほさず臺灣と言ふ特殊なる存在からの自らなる表現であり、今のわが臺灣の文化創造に貢献し得る精神力のある文學であり、文藝であらねばならぬと思ふ。臺灣民衆の精神生活を背景とする意氣激渾たる、個性の表現であると共に來たるべき時代の精神生活を構成して行く力、生命力の沸勃としたものであらねばならぬといふのだ。文藝は常に自己の内面生活の自叙傳であり、吾人の生ける命力の體系であり、其の時代の指導精神となり、生きる

情熱の根源である時に生き／＼とし、然らざる時は、其の文藝たるを知らない。故に妙くとも臺灣民衆の心を驚異と感激で満たし、するどくめさまさすには置かない様な聲を以て呼びかける原動力のある文藝、之れが臺灣文藝と言ふべきものである。

特殊性なきものは無い。臺灣といふ特殊なる實在と環境に立脚し、臺灣と云ふ實情によつて、着色されて而も今に一大伸展をなさねばならぬこの民衆に其の進路を暗示してくれ、あるべき吾々の生活改造を示唆してくれる文藝作品があるならば、吾らはそれを優れた「臺灣文藝」と呼ぶに躊躇しないであらう。

文藝については吾らは常に廣汎なる意義を持たせたい。如上、述べ來たる命脈を強く把握し得るものは、其の表現形式

の如何を問はず、吾らは臺灣文藝の中に網羅したいのである、近來とみに擡頭して來た白話文學の如き、舊來のクラシックな漢詩もよく、最も普通に書かれる邦文の現代的作品は言はずもがな、俗間に吟誦される俚謡もさては傳唱さるる歌も餘す所なく一網打盡して此の範疇に入れることを憚らないものだ。

只これらは、その何れにもせよ、須く臺灣の民土に生きる

者は此處に臺灣文藝界を一瞥して見よう。臺灣文藝ではないと觀する。吾らは斷じて言ふ。眞に透徹した意味に於ける臺灣文藝は臺灣といふ存在の中に絶えざる努力の生を切り抜けて來た者の、自己の姿の觀照に、泣き、笑ひ、さゝめくその止まれぬ叫びから生れ出づるものであると。

二、文藝展望

吾らは此處に臺灣文藝界を一瞥して見よう。臺灣文藝界、して人間性に迫るものがあらねばならないのである。かくて吾人の生活を深め、或は豊かにし、又改善を促す様な力のある思想の深く／＼こもらんことを祈求するものである。かくするためには吾々は絶えず自己の腕によつて開拓し、啓蒙して行かねばならない。臺灣の文藝は臺灣に生を享くる若き情熱青年が此を作り上げるべきだ。他人に之を委ねることは絶対に出來ない問題である、吾々の文學は、吾々自身の生活から、個性から生れ出でなければならぬ、吾々は如何に刺戟や滋養を與へられても、吾々自身に内在する生命力が缺如したならば、吾々の生育と伸展は望まれない。

他人の表現してくれた、臺灣を背景とする文藝も傑出した

文藝の生產者なる生活體夫れ自身の未だ、如何に貧弱にして、僅か好んでゐる文學的擡頭の如何に遲々としてすさま

さるかを。

一部の自ら先覺者と信じ居れる者といへども、何ら後覺者のために覺醒と邁進の進路を開拓すべく活動して居ないではないか。否なその彼等自身さへもが、必然的に生れ出づべき文藝界のよりよき生育のために自らが燃焼し、獻與してみないではないか。一部分の政治的運動家たちは居る。されど彼等は文藝的貢献のそれのために夢想だに思ひ及ばぬ人々ではあるのだ。

然し僕らは徒に悲觀をなし去る者ではない。空疏なればこそ充實の餘地はあり。幼稚なればこそ伸展と啓發の必要があるのだ。吾らは先づ生きることについての正しい理解を持たねばならない。そして自己の生活の着々なる建設に對する智慧と隱忍とを持たねばならない。而も生きることの情熱と生命力を枯死せしめざることが肝要だ。かく創造への智慧と真摯に生きんとする情熱を持つ吾等ならば、現在の吾が臺灣文藝界が如何に微々寥々たる不振の初期に在るとも、又これから出づる文藝作品が未だ偉大なる指導精神を吾らに反映せざるとも、それらは、吾らの今に渴仰する理想的文藝界の顯現のプロセスとして不完全ながらそのまますぐれたる至上の道

である。われらはこれの將來の健全なる進展を祈つて止まないものである。

かなり生命が長びいて「南溟藝園」は既に姿を没し、今

尚生きる漢文雜誌「南音」がある。これらは未だ充分に覺め

切らぬ花鳥風月に浮き身を棄してゐるだけ、ブルジョア文學として、貶されようが、然し兎に角わが臺灣的文藝だ。總體的な文藝的自覺はあらず、況やプロ的文學云々に至つては語るべき素材も持たない今時である。吾らはそのプロとブルとに論なく、齊しく人間性を淨化し、深化し、吾らの生活の眞に迫つて来る力のあるものならば、それに耳を傾け、敬意を表する寛廣な度量を持たうとするものである。「藤の道」はやゝ吾人の行路を諷刺して、吾らのために氣概を示し、「臺灣人はかく見る」は吾々の爲に氣焰を擧げようとはしてゐる、外、見るべき個人的著作も見渡らないのである。より多き臺灣文藝界らしい活動を吾らは「新民報」「臺灣新聞」や「日々新聞」……などへの小説、詩歌、文論說に見ようとするものである。

いとけなき乍ら、現代的小説も次第に多く試みられ、白話文學も日に々進歩擴張されつゝあつて、臺灣民衆へ働きかけるものである。

とじて燐たる光となつて輝くではなからうか。

翻つて文藝界を眺めよう。われ／＼はそもそも／＼こゝに失望を感じる。何處にまととの臺灣文藝の姿を眺め得るものぞ。吾々は具體的な文學作品乃至既成藝術に對して明確なる指摘と批判をもなし得ない程、吾人は臺灣文藝界なる存在に寂寥を感じざるを得ぬのだ。吾々は其の如何はしいブルジョア文學とプロレタリヤ文學との區別に念を置かず、其の白話體なると、臺灣語文體なると、和文體なるとを問はず又其の文學的意義の深淺に拘泥することなく、手あたり次第の臺灣的述作をすらも豊富に閲することが出來ないのである。生活意識それ自らが纖弱だ、文藝的活動への意欲が振はぬのだ。

最早や、目ぼしい「臺灣文學」雜誌の出現を見た、此の誕生は可なり吾等に希望を持たせた。

其の内容を見た者は一目瞭然、そのプロ的色彩の濃厚なに感づくであらう。又もとより臺灣プロ文學運動の唯一の機關雑誌として姿を現はしたものに相違ないが、其の民衆の指導機關ともなり、文藝界への第一歩を踏み入れた重大なる任務の斯雜誌の臺灣文藝作家協會自身が内的にも外的にもかけ／＼しからぬ問題に迷走の状態にあることは悲しむべきこと

けようとする氣風が近來増しつゝある傾向は慶賀すべきである。

三、文藝界への待望

われらの最初に望むは本島民衆の生活意識の強調だ、極少部の特殊な人の外何と無自覺な生活意識さへない者の如何に多きかを見よ、外面は即ち堂々たる構へをなし乍ら、その内容、實に人間的生活の反逆者であり、人間精神の破壊者であることを屢々目撃する。臺灣文藝界の進展はかゝる生活意識の強化と強調に俟つもの多く、而も其の任務を果すことが臺灣文藝界の一大使命ではあるまいか。吾らは今その何々文藝たるに懸念をする餘裕なく、先づ此の大基礎工事に着手をせねばならないと信ずる。

此の自覺のもとに「臺灣文學」は雄々しくも蹶起した、今後このグループの發展と活動に大に期待しようとする。「臺灣文學」はプロを標榜する者である丈け、この大衆化と民衆への啓蒙は、當然その荷を負ふべきでは無からうか。街頭や工場からプロ的作品の出現は多少あつた。然し臺灣の大部分を占めてゐるものは農民だ。その農民層からは何らの活動と

生産が現はれて居ない。農民層へのアクトイズム獲得が無して何の大衆化であるものぞ、何の基礎的組織的活動であるぞ、此の路頭に迷ふ大民衆に對する計劃も關心も考慮も組織もなくそれへの獻與がないといふことはわれらの遺憾とする所であり。峻酷に批評さるべき點である。本島特殊の習慣、風俗の打破改善、制度の革新迷信宗教への指導等々此の現實社會を赤裸々に解剖し分析し、批評をなし、其處にあるべき當來社會のまともな姿を提示せねばならないと信條するものである。一般作家一般藝術家は餘程この點を具象的な形に於て表現しなければならないと思ふ。

われらはこの啓蒙の時期に當り、思ひ切つて自己のありし姿を暴け出して自ら觀照批判をなし、自己の姿態を矯正し、取捨選擇思ふ存分に自己を新に改築し、其處に淨化された眞の自己を創り出すことに咎かであつてはならないのである。自己の姿を反省して見る時、實に不足と不満に充てる今のわが臺灣の實體ではないか。今の臺灣文藝界は自然主義的な動向のもとに思ひ切つて自己を獻供し、現實を暴露してよい時であると思惟する。自己を獻供するは却つて自己を獲得する所以である。徒らに其れを包みて糊塗し去らんとすることは

眞に自己を思ふ所有にあらず、一度自己を投げ出して、後に眞に残る部分を收拾して、更に自己を發展せしめ、生長せしめてゆく、これが臺灣文藝界の行首の一動向であり、現狀の臺灣を救うて行かうとする者の急務ではなからうかと信じて疑はないのである、自己の醜を醜と感悟した瞬間は既により淨化された自己の一段階を歩んだものであるからだ。只わが文藝界はそれ丈けに満足することなく、其の瞬間と共に次の段階に進み行かんとする意氣と快意に燃焼して居らねばならぬことが肝要であるのだ。

次にやゝ具體的にわが文藝界に對する希望を述べようと思ふ。

最近目覺しく發達を遂げて來た白話文學をわれくは歓迎するものである。歴史遠き古典的漢文が漸次吾人の實生活から遠ばなれて不便であり、びつたりと現代人に呼びかけることが出來なくなりつゝあるに鑑みて、白話文は其の生命を輝やかして出現したのである。斯の如き理想のもとに生れ出でたる白話文はそれ自身着眼は立派なものであり、必然的な成り行きではあらうと思ふ。然し其の現狀を見るに、斯の理想と使命に出でながら、其の活躍範圍如何、一般に本島インテ

リが之を解し得るものである、日淺き爲めではあらうが其の字句の成立と特殊的用字法にもそこばくの缺點なきにしもあらずである。現に出でゝゐる白話文學作品も、此又生硬そのものが多い様に感ぜられる、今の處未だに追隨的な位置にしか、おかれてもないのを情なく思ふ。斯白話文學の最後までの進展を見るべく幾多の課題が横たわつてゐることを思ふ。現代人生活の再認識、デリケートな感情の表現字句法、その成文律など／＼大に望み待たれる所ではあるまい。

時文、臺灣語文的表現は割合に民衆的だ、實用によく供されてゐるだけ、然しそれ以外の圈内に侵れたる文學的述作の現れてゐないことはどうしたことであらう。このよき民衆の伴侶の文字が是く文學的に生きざる事實一つで、現臺灣文學界の振はざる消息自ら感受されるのではなからうか。奮發一番、斯文學の振作に懲められんことを切に望む者である。クラシックな漢詩、金脈は即ち深遠であり、文學圈内に於ける活躍も大なるものがあつた事は事實である。これらは又有閑階級の月雪花的な風流道具に供されること多く、二十八字の平仄むやみに民衆をして敬遠せしめる恨なきにしもあらずである。これその功ありて、而も影響かならんとする悲し

みの存する處だ、覺めやらぬブル的自己満足も又笑止に堪へぬ皮肉ではないか、當來の詩はもつと平易な、自由な、拘束の少い新形式で、因襲的な觀賞眼と道徳觀から潛ぎ出でゝ、花鳥風月の境はさること乍ら、自由な、澄澈たる取材のものとに活きるべきである。白話文の詩、時文的な詩への進出、新氣ある作風これわれらの待ちあぐむ處だ。

和文の文學的表現——これはわれらの將來の最も大いに活躍すべき唯一の武器である、特殊事情のもとにある臺灣、その文學も又こゝに始めて偉大なる著作、創作が生れ出るであらう。現在の處未だ模倣的なものに過ぎぬ觀なきにしもある、然し既にかなりの成績と活躍を見えてゐるのだ。否將來の眞の文學的分野は恐らくこの圈内にのみ屬することになるかも知れない、われらは此處に和文の徹底的理解とその創作への充分なる發明あらんことを必然的な迄に期待して止まないものである、小説、詩文、評論、……すべて大に之によるべきことを認める。生きた現代的感覺、尖端化する現代的感情や、蓬萊的情緒の表現は、その完成を期しようと思へば、之をわすれては成しにくいと思ふのである、そして吾らは之によつて、爬羅剔抉、臺灣的な情緒と其の特色ある環境を餘さ

す文藝界の著作に集めねばならない。

最後に望むことは批評乃至評論界への進出だ、優れたる作家と先見ある評論家とは相提携して歩みて然るべきである、創作的・精神と批判的精神とは相依り相存する處多く、相俟ちてその進歩と成長とが始めて可能である、吾人、此處に文藝評論界への有爲ある人士の進出に多大の熱望を傾けるのである。既成作品が動もすれば無反省的なブル追隨的なものに墮したり、止揚されざる不純なものに終つたり統一貫通した思索系統をたどることに缺如があつたりしたのは又一に批判的眼識の缺乏と評論家の立つありて之を是正し批判するものがなかつたことに起因すると思ふのである。

四、結論

吾人はあくまで文藝界の臺灣的特色のもとに其の姿の發展しゆくを望むと共に、又臺灣といふ小圈内に終止させたくないものである、遂に偏頗な因陋な、アフペーベンされざる片輪ものに墮するを惧れなければならない、僕等は一地方人として終つてはならない、民衆の進歩も個性の生長も共に、自己を狭い範圍に局限する障壁を除き、偶然なものを必然なものにまで高め、局部的なものを普遍的なものにまで深め、

普通なる人間性をなる丈け完全に自己に培ふ様にせねばならぬと信ずるのである、人の心を眞に喜ばし、充實せしめ、或は蠱惑し、それを感じた者をして再現せしめずにはおかない底の思想や情熱は久遠に死滅しない生命があるのである、かくあらしめんがために、臺灣的文藝を國民的文藝にまで押し進あ、ひいては世界的文藝へまでの一脈を辿らしむべくその生長を期待せねばならぬのである。其の展開は遠大なるべきものであらねばならない、こゝにわが、臺灣文藝界の理想的な姿が翻翩と、おゝわれらの足どりをさしまねいでゐる。

(終り)

或る女性へ

吳坤煌

無信仰な家庭で育つた私は元來運命否定論者であり、人間の行爲が運命に左右されるとか、又は人間の運命が定つてゐるかと云ふ事を毛頭信じてゐない。従つて奇縁だと、前業だとか、事ある毎に其れを因縁に結びつけんとする輩を非常に嫌ひ極力にかかる信者を排斥する。物事には必ず原因があつて、結果が生ずるもので、即ち、必ず因果關係によつて連鎖してゐるものだと信する。蒔かぬ種子は生えぬとの俚言の如しだ。其故世間でよく謂はれる所の不可思議事も、或は奇縁事も必ず原因があり、其の原因が不可思議な結果を招來してゐるもので一定の法則に依つて支配されてゐる。唯往々結果のみ顯著に見えて、原因が全然知れない爲——無教育か、無智か、さもなければ、探求心の缺陷の爲——原因を探求すれば何等不思議でない事が、エタイの知れない物に見えたり、

怪しく思はれたりする。例を擧げる迄もなく、餘りにもよく知れ渉つてゐる事質だ。扱て、かく書いて來た私は何を言はんとするのか、始めて貴嬢に手紙を上げる者として、餘りにブツ切ら棒に見えるだらう。が、先づ前置きとして、之位書かねば、後で私の言はんとする事に差支へるから、失禮ながら、かく筆を運んで來たのである。

貴嬢と私とこうして知合ひになつたのも原因があつたのだ。理智に富んでいらつしやる貴嬢の事とて、私の説明を俟たずして、其の原因の何處に存するかを理解するに難くはないだらう、又今この手紙を差し上げるにも其處に理由が存在する。以前から私は「若くして人生行路に迷ふ女性へ」と題する一文を草して、私の出遇つた弱き多くの同志——女性に與へんと考へてゐたのである。しかも單に觀念に止めて未だ

林克夫和廠主周阿財是老同工，價錢可能再減少一點。接洽的結果，我們的雜誌，就在這裡付印了。自檢字至印刷之間，我記得我和陳君玉，每天都籠居在廠裡督導工作，或從事校對，而為雜誌早日產生，陳君玉和林克夫，還時時幫着工人排印，因此經過不久，雜誌便印就了。版式全文約一百頁，文字用新五號全部橫排，封面用玻璃版三色印，封面圖畫水菓是請名畫家楊三郎繪製的。本誌收載着一篇宣言，芥舟和我二首序詩，一篇卷頭言「臺灣新文學的出路」，一個「新文學出路的探究」的特輯，收錄黃石輝，周定山，賴慶，守愚，點人，君玉，郭秋生和我的意見，或就臺灣新文學運動。全體的發展上，或就新文學的一部門小說，詩，歌的創作上的進路，進行檢討，此外另有三篇論文，得時就「科學上的真與文藝上的真」，青萍就「詩歌的科學性」，逸生就「文學的時代性」各抒高見。理論以上還收載了克夫、得時、德音、H.C.、坤春逸生、月珠、毓文、文瀾、君玉、點人諸人十數篇的隨筆，新詩、臺語歌詞、及山本有三原作德音、月珠共譯的一篇戲曲「慈母溺嬰兒」原名「嬰兒殺し」和點人、櫻馬、毓文、克夫著作的「紀念樹」、「私奔」、「創痕」、「秋菊的告白」等四篇小說。另有楊雲萍、黃純青、蔡嵩林「談竹枝」、「郭沫若先生訪問記」。最後的一篇，是蔡嵩

林由遙遠地日本寄給我們的，只可惜，內容不大充實，發行後不能得到一般的好評，不過由其介紹，久被日人幽閉在孤島中的本省青年，纔能在海外和祖國的文人，取得連繫，這於當時的新文學運動，的確得到很大的鼓勵的。
機關雜誌第一號的「先發部隊」——這是「先鋒隊」的日本名稱，當時怎樣會選用這個名稱，已經忘掉了一出版後於民國二十三年七月十五日通過日政府的檢閱，我們便把它發出去了，除掉分贈寄稿者及分發新竹，臺中，臺南，高雄（四）處書店寄售外，殘餘多由我直接寄給函購者。可是，因為在經理方面大家都不大致力，所以寄售在各地書店的誌款，多沒有收回於是第二號的出版不得不延宕下來。

雖然同人們的情熱和期待，都沒有稍減，第一號的雜誌發行後，得到各方面的批評和鞭撻，大家益加奮發，因爲我們接到賴和、葉榮鐘、黃石輝諸人的指摘和楚女（張深切）的高評，都感到很大的教訓，內心暗暗歡喜，一般對諸同人的努力，沒有感到滿足，就是表示對於新文學的要求，已經提高了，因此大家越感覺責任的加重。尤其是臺灣文藝聯盟的機關雜誌「臺灣文藝」相繼產生了後，同人們都受到一種微妙的感觸，也許是爲了一種無謂的競爭心所驅使，大家都自勉勵，致力於第二號的出版。

這時候臺灣新文學運動的巨浪，已經澎湃於全島，臺

創刊號

臺灣藝術研究會發行

VOLINO!



